

ロール・ブレイング形式で学べる「連携・協働」のコツ

# 学校・地域で役立つ 子どもたちのこころを支える連携・協働ワークブック

前川あさ美 編著

B5判 152頁 定価2,310円(税込)

不登校、いじめ、虐待、保護者対応、特別支援教育など、「11のワーク」を通して、小・中学校の教師、管理職、スクール・カウンセラー、地域の支援者など、子どもも支援にかかるさまざまな職種の人たちが、学校の内外でどのように「連携・協働」して子どもを支援していくかを学べる一冊です。



- 第2部 ワーク
- 1 不登校と家庭訪問
  - 2 いじめられている……
  - 3 発達障害かも?
  - 4 親の死とこころの傷
  - 5 自傷行為
  - 6 予測される危機と守秘
  - 7 インターネットのリスク
  - 8 虐待の疑い
  - 9 保護者の怒り
  - 10 保護者が抱える精神的問題
  - 11 支援者の不信感

第1部 連携・協働とは

- 1 連携・協働とは
- 2 連携・協働という課題  
—BILIの研究から
- 3 連携・協働における難しさ  
—内外の研究より
- 4 連携・協働における守秘と情報共有
- 5 めざしたい連携・協働のあり方



03(3941)0111㈹ FAX03(3941)0163  
URL http://www.kanekoshobo.co.jp

雑誌05144-10  
①-2011/11/11  
Printed in Japan

児童心理

昭和22年4月28日第3種郵便物認可 平成23年10月5日発行 第65巻第15号●児童心理10月号臨時増刊

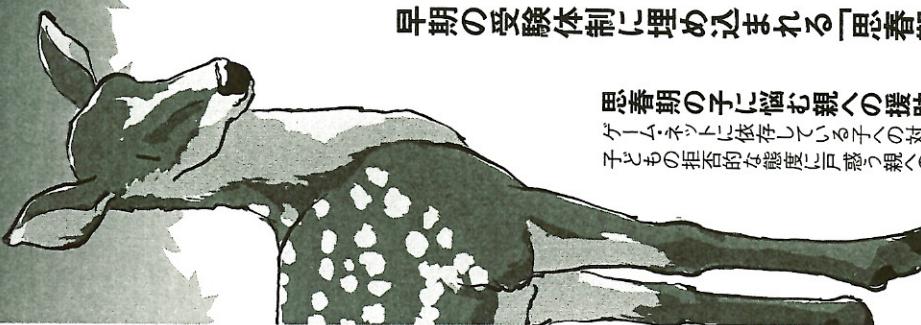
定価1260円 本体1200円

## 思春期のこころ

児童心理

2011年10月号  
臨時増刊 No.939

## 思春期のこころ



### 発達障害を抱えた子どもたちの思春期

#### 思春期の子への教師のかわり

思春期の子どもとの関係づくり／勉強のやる気を失った子への援助／高学年女子へのかわり方

## 思春期といつ時代

### 思春期の心理と変化

身体の変化／友人関係／自己意識／親子関係／問題行動

### 早期の受験体制に埋め込まれる「思春期」

#### 思春期の子に悩む親への援助

ゲーム・ネットに依存している子への対応／子どもの拒否的な態度に戸惑う親へのカウンセリング

金子書房

4910051441010  
01200

友人関係が大きく変化するとき

## 思春期の男女交際について考える

人格教育・性的自己抑制教育の観点から

神戸学院大学教授 石崎淳一

筆者は、大学生や大学院生らと、思春期、青春期の性意識や性行動についての調査を行つてきました。また、米国の人格教育や性的自己抑制教育を参考にしながら、青少年の心身の健康リスク行動である性行動の抑制を促進させる教育について考えてきました。本稿では、そうした立場から男女交際というテーマについて述べてみたい。

## 道徳の指針と中学生の男女意識

先に触れた人格教育というのは、日本でいえば道徳教育である。中学校の学習指導要領の道徳の章に示された道徳の「内容」のはじめは「主として自分自身に

・男女は、互いに異性についての正しい理解を深め、相手の人格を尊重する。

こりには、他者との関わりにおいては、子どもがまず周囲の大人たち一般への信頼感をもち、さらに同年代の同性の子どもと友情を築き、そうした人間に対する具体的な信頼の基盤のうえに、やがて異性との交際が大切な課題となつてくることが示されていると思われる。

それでは、実際の中学生の男女交際についての意識はどうであろうか？ 一つの例として、ある中学一年生の、「男女交際」を主題にした授業での生徒たちの意見を取り上げてみる。

「対一の男女交際をしたいと思うか？」という質問に対して、男子も女子も「したい」と答えてているのは、約二割程度である。したい理由としては、「周りを見っていて楽しそう」ということのようである。一方、「したくない」という回答は、約四割から五割で、こちらの方が多い。理由は「同性の友だちでいた方が楽しい」ということと「部活や勉強に集中したい」ということのようである。残りは「わからない」と回答している。

関すること」であり、その次は「主として他の人ののかかわりに關すること」である(1)。

「自分自身に關すること」の中には、「節度を守り節制に心掛け」や「自律の精神を重んじ」という文言があり、これは道徳がまず自己を律する」と、欲望や衝動に対する自己抑制を求めていることを示すものである。

そして「他の人ののかかわりに關すること」には、以下のことが含まれている。

- ・温かい人間愛の精神を深め、他人々に対し思いやりの心をもつ。
- ・友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合う。

これは推測であるが、筆者のうしなじ意識調査の経験から考えると、「わからない」という回答は、結果的には否定的な方向に傾いているように思われる。この態度保留といふ姿勢がそのまま行動に表れる可能性があり、この群は場合によつては「したくない」群よりもむしろ交際をしないこともありえるように思われる。

この結果から確認されることは、思春期の性の問題では個人差が大きいことと、(1)に記したものに中学生の段階では男女交際をめぐる生徒の意見は、全般的には大人から見ても一般性の高いものであり、とくに問題と言えるようなものではないだろうといつてある。

## 現代の思春期・青年期の性行動の問題点

しかし、それでは先に記されたような道徳的指針に適うよくなかったらで実際に男女が異性関係を深めていくのだろうか？ どうしたことを見つと、これはきわめて疑問である。まだ基本的には性的活動が開始されていない中学生たちの意識の延長上に、性的活動が開始さ

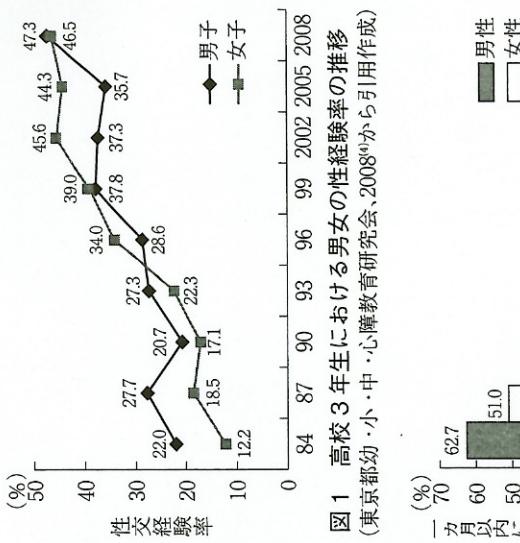
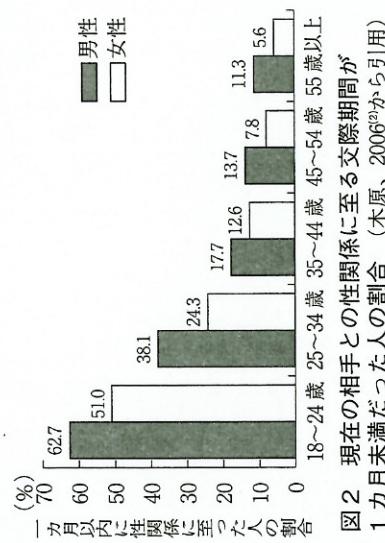


図1 高校3年生における男女の性経験率の推移  
(東京都幼・小・中・心臓教育研究会、2008<sup>14)</sup>から引用作成)

れる（開始されたる）高校生以降の男女交際が、彼らの「人格の成長」や「人間関係の豊かさ」にとってプラスとなる経験となつてゐるとは言い難いと思われるのである。

思春期の異性への目覚めは、人生における将来の親密な異性との関係構築の始まりであり、その到達点には相手と肉体的にも性的な関係をもつことがあるのだが、それは高校生でも容認されるのであらうか？ 意



調査によれば中学生や高校生は、高校生が性的活動を行うことを認めているのであり、また実際に性行動を開始している（2）（3）。そこで端的に性行動という面から、実際の状態を見てみよう。

図1は、高校三年生の性交経験率の推移を表したグラフである。この上昇傾向は最近少し沈静化したという印象をもつてゐるが、すでに高い水準に達してゐることには変わりはない。この急激な変化は一九九〇年代に起つて、とくに女子の変化はきわめて劇的であった。どうしてこのような変化が起きたのか、その心理

社会的要因が興味深いところであるが、現象としては一種の「性の解放化」と言えるであろう。

一〇代の性的活動の特徴として、さらに認識しておくべきことは、知り合つてから性的関係をもつまでの期間の短さと、性的関係をもつた相手の累積人数の多さである。図2は、こうした九〇年代に起つた日本人の性行動の大きな変化を調査した木原らのデータであるが、交際期間が1カ月未満で性的関係に至つてい

るのは年代が若いほど急激に割合が高くなり、一八歳から二四歳の回答者においては、過半数にのぼつてゐる（2）。そして、こうしたパートナーとの付き合いがあまり長く続かないために、累積の性交経験人数といふものが多くなるのである。木原らは、高校二年生で、男女ともにすでに累積パートナーが二人や四人以上になる者の割合が性交経験者の約二〇%であったことを報告している。

筆者らが大学生に行つた調査でも、性交経験率は約四五%で男女差はなかつた。初交に関して、出会つてから性交に至る期間は、これも男女差がなく、約三〇%が1カ月以内であり、そして約八〇%が六カ月以内であった。初交に至るのがこういう短い期間であるから、その後はさらに期間が短くなる可能性があり、先の木原らの報告の、今のパートナーとの性交に至る期間が1カ月未満といふこともうなずけると思われる。そして、大学生の性交経験者における累積の性交人数は平均で四人であった。

知り合つてそれほど付き合う期間もなく性的関係に至り、さらに一人のパートナーと長く付き合つことなく、別のパートナーとの関係に移行する、このような

男女交際では、けつして道德の指針にあつた「男女は、互いに異性についての正しい理解を深め、相手の人格を尊重する」付き合いとは言えないであろう。さらに言えば、男女間の愛は、それまでの兄弟姉妹の愛やその延長である友情のうえにプラスアルファの要素が付け加わつて成立するものである。それは、相互理解と相互信頼に基づく、一時的なものではない、より永続的な人間関係ということなのだが、その点で、今の青少年は、そもそも同性間の友情において、相互の尊敬や理解、信頼に立脚した深い関係を作られているのだろうか？と疑問に感じる。

「カレシの元カノの元カレを、知っていますか」というのはエイズ予防の広告で使われた言葉であり、これはHIV・エイズの感染拡大を招く性的な繋がりの広がりをイメージさせようとしたものであろうが、実際は「元カノの元カレ」どころか「彼氏の過去について直接本人に聞くことなどできない」というのが実際の若い男女の関係であり、同時に「彼から身体を求められれば拒めない」とも言つのである。

こうした姿を見ていて思はされるのは、彼らが、性的活動は生理的であると同時にきわめて心理的な活動

であり、したがって、性的に最高の満足が得られるのは成熟した永続的なパートナーとの間であるといつ單純な真実を知らないのではないかということである。

## 米国の人格教育と性的自己抑制教育

日本が性の解放化の方向に向かっていた一九〇年代、日本ではよく知られていないのだが、性の解放化の先進国であった米国は、米国型のキリスト教的な家庭モデルの崩壊が共同体と国家を衰退させたという認識のもとに、実はそこからの回復の努力をしていたのであった。そこでは公教育において人格教育が展開され、人格教育のベースの上に多くの性的自己抑制教育プログラムが開発された。性的自己抑制教育は、禁欲教育とか節制教育とも訳され、筆者は「性的自律教育」と呼ぶではどうかと述べた<sup>(5)</sup>。自己抑制を基礎とした性教育と言つてもでき、これは言い換えれば、人格教育を基礎とした性教育ということである。

性的自己抑制教育の中心メッセージは以下のようなものである。

・青少年期における性的な自己抑制には、人格成長の

ための大きな意義（メリット）がある。

- ・現代社会においては、H.I.V・エイズや性感染症が深刻な医学的、社会的脅威であり、青少年はどこにそのリスクが高い。
- ・したがって、青少年にとって結婚まで性関係を控えるということは最も選択である。

人格教育の研究者の中には、性的自己抑制教育を性教育と呼ぶよりは「愛と結婚の教育」と呼ぶべきであると述べている者もいる。「性教育」に対して「愛と結婚の教育」という言い方は日本人にはあまり馴染みがないと思われるが、米国ではたとえば大学生に対する結婚（婚前）教育というものが存在するし、まだカツプルカウンセリングというものはカウンセリングの一つの領域となっているのだが、こうしたものは日本にはほとんど輸入されてこなかった。しかし、たとえば米国の人格教育では、中学生に対して家庭における父母の葛藤場面——経済的困難や子どもの勉強に対する意見の相違など——を設定して、その解決を議論させるといったことをしているが、これなどは日本でも可能であろう。

筆者がある研究会で、結婚まで性的関係をもたない

という性的自己抑制教育の考え方を紹介したこと、参加していた養護教員志望の学生から「新しい考え方ですね」と言われてしまったのだが、それくらい日本人の感覚は性行動の解放化の方に傾いたのであろう。しかし、河合も指摘するように、性はそれほど容易にコントロールできるものではなく、性の解放化はむしろ人間が性に翻弄されていると言ふべき事態である<sup>(6)</sup>。もし私たちが何らかの事業を成功させたいと思えば、そのための周到な準備が必要であろう。結婚という人生の大事業を成功させるために、それまでにどのような準備をすべきであるのかということを、教育的な視点からもう少し考えてみてもいいのではないだろうか。

### 文献

- (1) 文部科学省「中学校学習指導要領」一〇〇八
- (2) 木原雅子「一〇代の性行動と日本社会——そしてW.Y.S日教育の視点」ミネルヴァ書房、一〇〇六
- (3) 石崎淳一「大学生による高校生への『性的自律教育』(Abstinence Education: A.E.)」の試み」「臨床心理学」八巻四号、五五三—五五八頁、一〇〇

### 八

- (4) 東京都幼・小・中・心障教育研究会（未刊行報告）、一〇〇八
- (5) 石崎淳一他『愛と性の尊厳——心豊かな思春期を送るために』アートヴィレッジ、一〇〇七
- (6) 河合隼雄『大人になることのむずかしさ』（新装版）岩波書店、一九九六